令和７年度　印旛地区教育研究集会

国語科「話すこと・聞くこと」分散会提案資料

研究主題

自分の考えをもち、表現する児童を育てる指導法の工夫

～人との関わりを大切にした『話す・聞く』の指導を通して～

白井市立桜台小学校

１　研究主題

自分の考えをもち、表現する児童を育てる指導法の工夫

～人との関わりを大切にした『話す・聞く』の指導を通して～

２　主題の設定理由

（１）学習指導要領より

育成をめざす資質・能力を「①知識・技能　②思考力・判断力・表現力　③学びに向かう力・人間性」とし、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を求めている。特に、本校の研究主題は、「自分の考えをもち、表現する力を育てる指導法の工夫」としているが、これは②思考力・判断力・表現力の「日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う」に関連する部分が多く、これからの教育に必要不可欠なものであると考える。

そこで、本校では、各ブロックで以下の目標を作成した。

	話すとき	聞くとき	話し合うこと
低学年	相手意識をもち、話す事柄の内容を考え、声の大きさや速さなどを工夫して伝える。	相手が伝えたいことを落とさないよう集中して聞く。	互いの話に関心をもち、相手の発言を受けて話をつなぐ。
中学年	相手意識をもって話の中心や話す場面が明確になるように内容を考え、工夫して伝える。	相手の伝えたいことの中心を捉え、自分の考えをもって聞く。	互いの意見の共通点や相違点に着目して考えをまとめる。
高学年	相手意識をもち、話の構成を考え、資料を活用するなどして、工夫して伝える。	話し手の考えと自分の考えを比較しながら聞く。	互いの立場や意図を明確にしながら話し合い、考えを広げたりまとめたりする。

「話すこと」では、イ考えの形成　ウ表現・共有、「聞くこと」では、エ構造と内容の把握・考えの形成・共有、「話し合うこと」では、オ考えの形成・共有を受けたものである。

（２）学校教育目標より

未来に向かってがんばる子　～チャレンジ～

主体的に学ぶ子 〇粘り強く学びに向かう子 〇見通しをもって学習する子 〇学習の成果を生かせる子	心があったかい子 〇丁寧に話をする子 〇元気に挨拶をする子 〇自分も他者も大切にする子	あきらめず、努力する子 〇できることを増やせる子 〇健康を促進できる子 〇自分の命は自分で守れる子

本校は、上記の学校教育目標及びめざす児童像を掲げ、日々その具現化に努めている。「自分の考えをもち、表現する力を育てる」では、他者との関わり合いを大切に、自分の思いや考えを伝え合う中で、表現する力を育てていこうと考える。

（３）児童の実態より（児童の様子・教員のアンケートによるつけたい力）

聞く	最後までしっかり聞くこと
	要点を聞きとる力
	話し手を見てきしっかりと聞くという基本の徹底
話す	相手に伝えよう、届けようと発表や話す姿が弱い
	伝えたいことを、はっきりと相手に聞こえるように言うという基本の徹底
	自分が伝えたいことをまとめられる力
話し合うこと	共感力
	聞いている話を自分の事として捉えながら聞くこと

本校は通常学級が１２学級、特別支援学級が３学級あり、３７９名の児童が在籍している。令和６年度にはコミュニティスクール推進校に選ばれ、学校・家庭・地域が連携し、様々な人の目で児童を育成していこうとする意識が高くなっている。

本校の児童の特徴として、コロナ禍で人と接する機会が少なかったでいか、まだまだ自己中心的な児童が多く、相手に興味をもてない児童が多い。自分のことを伝えたり、相手のことを理解しようとしたりする意識の低さがうかがえる。このことが国語科の学習においても大きく影響していると考える。上記の教員による国語科（話す・聞く）アンケートからも、相手意識をもって自分の考えを伝えたり、相手のことを理解するために話を聞いたりすることに苦手意識をもっている児童が多いことが分かる。また、話し合う際には一方通行になりがちになっていることも多くある。

以上のことからも、人との関わり合いを大切にし、相手意識をもって伝え合う場を工夫すれば、自分の考えをもって表現する児童が育つだろうと考え、本主題を設定した。

3　研究仮説

仮説①

単元のゴールを提示すれば、自分の伝えたいことを具体的にイメージし、考えを明確にすることができるであろう。

《誰に》話すか　《何を》話すか

【仮説①の手立て】

単元のゴールの提示

・教員が作った単元のゴールの作品や発表を提示し、児童がめあてをもつことができるようにする。

学習（単元）計画の作成・確認

・ゴールに向けて、どのように学習を進めていくかを確認する。

相手意識

・誰に伝えるかを明確にすることで、一人よがりの発表ではなく、他者に伝える意識をもてるようにする。

仮説②

伝え合いの場を工夫すれば、進んで話したり聞いたりすることができ、表現する力が身に付くだろう。

《どのように》伝えるか　《何を》聞くのか　《どのように》感じたか

【仮説②の手立て】

伝え合いの工夫

・伝え合いを行う形態を工夫する。
（ペア　グループ　自由な話し合い　全体　など）
・役割を決めて伝え合いを行う。
（先生役や児童役　など）
・伝え合うための手段の工夫
（ICT の活用　発表ボード　など）
・段階的な場の工夫
（練習⇒本番）　（１回目⇒改善⇒２回目）

話し手の工夫

・ICT で発表資料の提示を行う。

・実物を見せて発表を行う。

聞き手の工夫

・振り返りカードの作成による、聞く視点の焦点化

・相手を受け入れる姿勢（共感ワード・あいのそなたさ）

4　研究の計画

１年生

実践授業①
１年生「なつのおもいでをはなそう」

実践の成果・課題を受けて

実践授業②
１年生「はじめてしった学校のこと」

６年生

実践授業①
６年生「オリジナルストーリーを作って、みんなに紹介しよう」

実践の成果・課題を受けて

実践授業②
６年生「哲学対話をしよう」

5　実践

授業実践①（第１学年）

単元名　「なつのおもいでをはなそう」
教材名　「なつのおもいでをはなそう」

≪仮説①に対する手立て≫

単元のゴールの提示

実際に教員が夏に経験したことを話し、手本を見せることで、児童が学習の見通しをもち、自分の考えがもてるようにする。

相手意識

『クラスの友達』に『夏休みに経験したこと』を話すことを確認する。

≪仮説②に対する手立て≫

話し手の工夫

絵や夏の思い出の品（実物）など、思い思いの物を持ち寄って話をすることで、自分の思いを、自信をもって伝えられるようにする。

話すためのポイントのチェック項目を作り、聞き手に評価をしてもらう。

成果と課題

●適切な言葉遣いが身についていないため、相互評価の場面で相手を傷つけてしまうことがあった。
●話し手の指導に重点をおいていたため、聞き手の意識が不十分であった。
●聞き手が積極的に改善点のみを伝えてしまったため、それを受け取った話し手の意識が低くなってしまった。

上記の課題を受けて

授業実践②（第１学年）

単元名　「はじめてしった学校のこと」 （教材名）　はじめてしった学校のこと

≪仮説①に対する手立て≫

単元のゴールの提示

桜台小の先生方に話を聞き、初めて知ったことを友達に伝える学習であることを話した。そのためには、どのような準備をすればよいか話し合い、学習計画を立てた。

教科書に付属するワークシートを基本とし、学級の児童に合うよう少し文言を変更した。さらにワークシート一枚と学習計画表を新たに作成した。聞きに行く学習の練習で役割が分かるよう「先生」役の分かる名札を用意した。

学習計画の掲示

児童が今どの学習をしているのか分かるように学習計画を作成・掲示した。

相手意識

『クラスの友達』に『学校の先生のこと』を話すことを確認する。

練習の際に、グループの中で、先生役と児童役に役割を分け、実際にインタビューをしに行くような場を作り、練習を行った。

≪仮説②に対する手立て≫

伝え合いの工夫

練習の際に、グループの中で先生役と児童役に役割を分け、実際にインタビューをしに行くような場を設定し、繰り返し練習を行った。

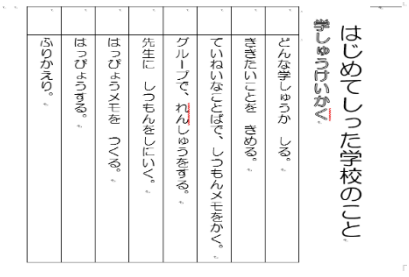
話し手の工夫

話すためのポイントのチェック項目を確認し、意識して話ができるようにする。

聞き手の工夫

練習の際に、ワークシートには、聞く側が意識できるよう聞くポイントの項目を設けた。

また、ワークシートに「ていねいな言葉で質問を書く」項目を入れ、相手に伝える意識ももてるようにした。



授業の実際

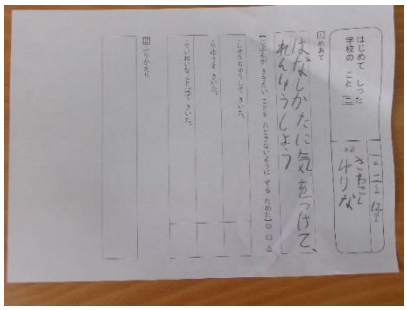
≪単元のゴール≫

「はじめてしった学校のことをともだちにつたえよう。」

《練習の様子》

先生役には名札を下げてもらい、相手意識を明確にして、質問に答えるようにした。練習を繰り返すうちに、自信をもってはきはきと発表したり質問したりすることができるようになった。

≪児童の振り返り≫　ワークシートを使い、今日の練習で３つのことが意識できたかふり返りをした。



３つのポイント
・しゅうちゅうしてきいた
・りゆうをたずねた
・ていねいなことばでたずねた

＜成果＞
○「ていねいなことばでしつもんメモをかく」時間を取り入れたことで、質問が整理された。
○繰り返し練習することで、後半には自信をもってはきはきと言うことができた。
○子どもたち同士の交流が活発になり、班で協力してワークシートを書いたり、練習をしたりする姿が見られた。
○練習時のふり返りシートと本番時のふり返りシートと２回書くことで、練習ではできなかったが本番ではできたと、比べることができた。
○友達と見合うことで、本番にお話をするためのポイントを上手に抑えることができた。
○聞き手のポイントが分かるワークシートを取り入れたことで、聞く側にも意識が育ち、より良い伝え合いができた。

＜課題＞
●児童同士の話し合いが少なく、教員と児童の双方向だけの班もあった。
●練習時と本番時のふり返りシートに変わりがなく、成果を感じられない児童がいた。そういった児童にどのようにアプローチしていけば良かったのかが、課題である。

授業実践①（第６学年）

単元名　「オリジナルストーリーを作ってみんなに紹介しよう」
教材名　「あなたは作家」

≪仮説①に対する手立て≫

単元のゴールの提示

教員が実際に書いた物語を見せ、単元のゴールのイメージを具体的に示す。また、オリジナルストーリーを書くためにどのように学習を進めていけば良いか話し合いを行い、学級全体で単元の計画を立てた。

相手意識

図書室に完成した物語を置き『図書室に来た子どもたち』が読むことができるようにする。

≪仮説②に対する手立て≫

伝え合いの工夫

児童が自信をもって物語を書くことができるよう、児童同士でアドバイスし合える場を設ける。その際、「自分が考えたあらすじの紹介」「友達に相談したいこと」など、論点をしぼって話し合いに臨めるようにする。様々なアイディアが出るよう、話し合いの人数構成を４～６人グループにする。

成果と課題

●様々なアイディアが出ると考え、グループの人数構成を４～６人と多くしたが、少人数のほうが、話し合いがより深まること、そして、一人一人が自分の考えをもって発言するという意味では、もっと少人数のほうが良かった。

上記の課題を受けて

授業実践②（６学年）

単元名　　自分の経験と重ねて読み、考えを広げよう （教材名）「うれしさ」って何？――哲学対話をしよう

≪仮説①に対する手立て≫

単元のゴールの提示

単元の始めに教員が作った哲学対話の様子を映像で提示し、児童に見通しをもたせた。グループの話し合いのテーマを設定し、児童が主体的に活動できるように学習計画を立てるようにした。また、話し合いのテーマは、教員が様々な哲学テーマを提示し、そこから選んだり、自ら設定したりできるようにした。

相手意識

グループを作り、哲学対話を行っていくことを伝えた。

≪仮説②に対する手立て≫

伝え合いの工夫

〇ICT の活用

小集団で話し合いをする際に、タブレット PC を活用し、テーマに対して自分の考えを一人ひとり出し合い、共通点や相違点を分類していきながら対話をしていく活動を取り入れた。なかなか自分の考えを発表することができない児童にとって、相手に直接伝えるという行動には大変勇気がいることである。その障壁を取り払うために、間接的に自分の考えを表現できる場を用意した。その考えに対して、周りの児童が話題として取り上げることで話し合いを活発にすることができるのではないかと考えた。

〇話し合いの広げ方についての基本的な指導

相手の考えをまずは受け止めて、その考えに寄り添いながら共感する態度を育成できるようにしたい。そこで、話し合いの練習機会を設定し、共感的に相手の考えを認めながら課題を解決できるようにする。話し合いをする際には、「共感ワード」を掲示し、児童がすぐに活用できるようにする。そのような手立てをしていきながら、自分の考えを話すことが苦手な児童も安心して発言することができるようにする。

〇形態の工夫

集団の人数を４人に設定し、意図的に一人ひとりが発言する機会を増やせるようにする。集団

の構成は、指導者が行う。話し合いを上手に進行することができる児童を必ず一人、集団に入れるようにする。また、友達関係の実態を考慮した上で小集団を組むようにする。

〇練習の場の設定

哲学対話にいきなり入るのではなく、各グループでテーマを複数選び、練習する時間を確保する。そして、哲学対話の本番に向けて、話し合いを深めることができるようにする。

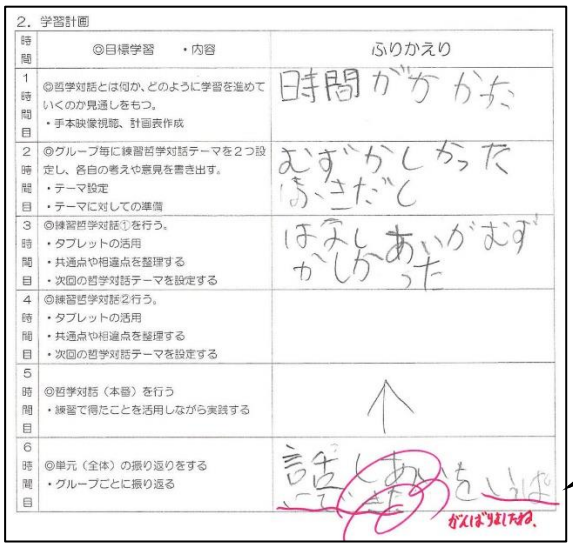
授業の実際

≪単元のゴール≫

哲学対話教員手本

教員が手本を見せることで、想像力が働かない児童にも、哲学対話の仕方や共通点や相違点を分類する方法を考える手助けとなった。

《児童の振り返り》



2．学習計画

時間	◎目標学習　・内容	ふりかえり
1時間目	◎哲学対話とは何か、どのように学習を進めていくのか見通しをもつ。 ・手本映像視聴、計画表作成	時間がかかた
2時間目	◎グループ毎に練習哲学対話テーマを２つ設定し、各自の考えや意見を書き出す。 ・テーマ設定 ・テーマに対しての準備	むずかしかった ふかさだと
3時間目	◎練習哲学対話①を行う。 ・タブレットの活用 ・共通点や相違点を整理する ・次回の哲学対話テーマを設定する	はなしあいがむずかしかった
4時間目	◎練習哲学対話②行う。 ・タブレットの活用 ・共通点や相違点を整理する ・次回の哲学対話テーマを設定する	
5時間目	◎哲学対話（本番）を行う ・練習で得たことを活用しながら実践する	↑
6時間目	◎単元（全体）の振り返りをする ・グループごとに振り返る	話しあいをしよう がんばりましたね。

児童Ａは、哲学対話１回目の話し合いで意欲的に参加することができなかったが、３回目（本番）では、向き合いやすいテーマで意欲的に話し合いに参加していた。周りの児童に共感してもらうことも増えて、発言に対して自信をもっていた。また、話し合いの見通しをもつことができた様子もあった。

2. 学習計画

時間	◎目標学習　・内容	ふりかえり
1時間目	◎哲学対話とは何か、どのように学習を進めていくのか見通しをもつ。 ・手本映像視聴、計画表作成	グループ名決めに時間がかかった
2時間目	◎グループ毎に練習哲学対話テーマを２つ設定し、各自の考えや意見を書き出す。 ・テーマ設定 ・テーマに対しての準備	未解決殺人事件が多数あった
3時間目	◎練習哲学対話①を行う。 ・タブレットの活用 ・共通点や相違点を整理する ・次回の哲学対話テーマを設定する	ほとんど意見が一緒だったけど違う意見もあった ／自分と違う発見があった。
4時間目	◎練習哲学対話②行う。 ・タブレットの活用 ・共通点や相違点を整理する ・次回の哲学対話テーマを設定する	天国に行くことや地獄に行くことが共通していた。けど天国での過ごし方や世界のそうぞうはちがった
5時間目	◎哲学対話（本番）を行う ・練習で得たことを活用しながら実践する	人によって違う意見もあるけど同じ意見も多くあった。話し合うことによって共通点が見つかってくる
6時間目	◎単元（全体）の振り返りをする ・グループごとに振り返る	

児童Ｂは、哲学対話が進むにつれて、話し合いで導き出すことのよさに気付く変化が見られた。共通点や相違点の見つけ方が分かるようになってきた。

2. 学習計画

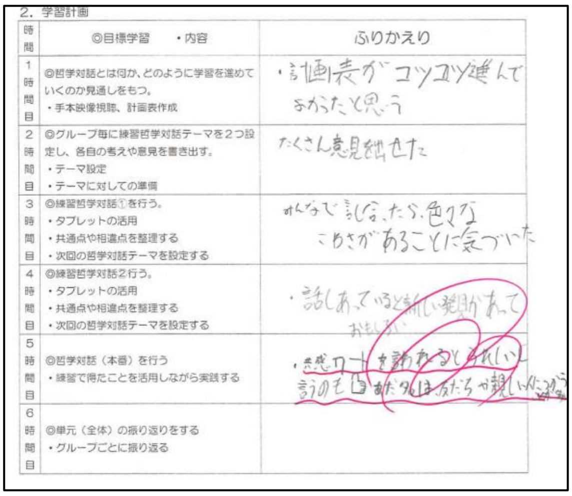
時間	◎目標学習　・内容	ふりかえり
1時間目	◎哲学対話とは何か、どのように学習を進めていくのか見通しをもつ。 ・手本映像視聴、計画表作成	様々な意見が出て、見通しがもてた！
2時間目	◎グループ毎に練習哲学対話テーマを２つ設定し、各自の考えや意見を書き出す。 ・テーマ設定 ・テーマに対しての準備	自分の意見を深く考えれた！
3時間目	◎練習哲学対話①を行う。 ・タブレットの活用 ・共通点や相違点を整理する ・次回の哲学対話テーマを設定する	人の意見をよくきくことができた。
4時間目	◎練習哲学対話②行う。 ・タブレットの活用 ・共通点や相違点を整理する ・次回の哲学対話テーマを設定する	とても共感できるけいけんがでた。
5時間目	◎哲学対話（本番）を行う ・練習で得たことを活用しながら実践する	・他のグループで同じテーマがあったが、けっかが違い様々な考え方があることが分かった ・共通点は似ている!! たしかに！
6時間目	◎単元（全体）の振り返りをする ・グループごとに振り返る	

児童Ｃは、哲学対話が進むにつれて、他のグループの哲学テーマに関心をもつようになった。自分たちのグループの考え方と他のグループの考え方を比較するようになった。また、自分だったらと、哲学に対して深く考えるようになった。

2. 学習計画

時間	◎目標学習　・内容	ふりかえり
1時間目	◎哲学対話とは何か、どのように学習を進めていくのか見通しをもつ。 ・手本映像視聴、計画表作成	見通しができた。
2時間目	◎グループ毎に練習哲学対話テーマを２つ設定し、各自の考えや意見を書き出す。 ・テーマ設定 ・テーマに対しての準備	自分の考えをかけた
3時間目	◎練習哲学対話①を行う。 ・タブレットの活用 ・共通点や相違点を整理する ・次回の哲学対話テーマを設定する	タブレットを使って対話ができた。
4時間目	◎練習哲学対話②行う。 ・タブレットの活用 ・共通点や相違点を整理する ・次回の哲学対話テーマを設定する	みんなで話し合うことができた。
5時間目	◎哲学対話（本番）を行う ・練習で得たことを活用しながら実践する	今までの練習の成果を本番で発きできた。
6時間目	◎単元（全体）の振り返りをする ・グループごとに振り返る	

児童Ｄは、哲学対話の練習の成果に価値を見出していた。練習をしていく中で、グループの話し合いが深まっていくことを感じていた。



2. 学習計画

時間	◎目標学習　・内容	ふりかえり
1時間目	◎哲学対話とは何か、どのように学習を進めていくのか見通しをもつ。 ・手本映像視聴、計画表作成	・計画表がコツコツ進んでよかったと思う
2時間目	◎グループ毎に練習哲学対話テーマを２つ設定し、各自の考えや意見を書き出す。 ・テーマ設定 ・テーマに対しての準備	たくさん意見を出せた
3時間目	◎練習哲学対話①を行う。 ・タブレットの活用 ・共通点や相違点を整理する ・次回の哲学対話テーマを設定する	みんなで話し合ったら色々な[illegible]があることに気づいた
4時間目	◎練習哲学対話２行う。 ・タブレットの活用 ・共通点や相違点を整理する ・次回の哲学対話テーマを設定する	・話しあっていると新しい発見があっておもしろい
5時間目	◎哲学対話（本番）を行う ・練習で得たことを活用しながら実践する	・共感カードを[illegible]とうれしいし言うのも[illegible]友だちや親しい人に[illegible]
6時間目	◎単元（全体）の振り返りをする ・グループごとに振り返る	

児童Ｅは、積極的に自分の考えを他者に伝えることが苦手な児童だったが、練習を重ねて、周りの児童と関係ができたこと、発言した時に共感してくれたことに喜びや安心感を感じていたことが分かる。

《話し合いの様子》

テーマの例
・達成感とは
・幸せとは
・友達とは

＜成果＞

○単元の導入で教員が実際にゴールを示すことで、見通しをもつことができ、話し合いに意欲的に進める児童が多かった。

○話し合いと ICT の活用を掛けたことで、瞬時に自分の考えを共有したり、グループ全員で分類の操作をしたりすることができ、効率的に話し合いを進めることができた。また、発言することが苦手な児童も自分の考えを示すことができ、その考えを周りの児童が拾って話し合いを進めることもできた。

○話し合いのテーマを自分たちで選ぶことで児童が主体的にテーマについて考え、活動することができた。テーマがどのグループも異なるもので進行していたため、他のグループが話し合いの内容を初めて聞いた時に、自分の立場だったらと思考するきっかけを作ることができた。

○練習時間を設定したことで、話し合いの進め方を理解しながら進めることができた。３回目の哲学対話では、どのグループも話し合いが活発になり、共通点や相違点を分類する活動が上手になっていた。

＜課題＞

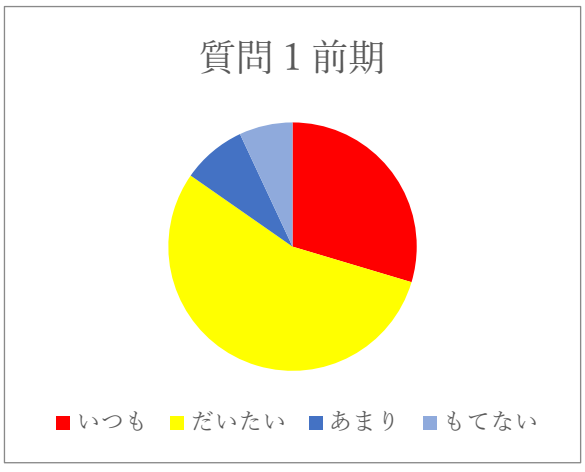
●テーマによっては、定義に固執してしまい、表面的な考えを話し合ってしまい、そのテーマの本質的なところまでにたどり着かないグループもいた。恐らく、児童の経験の薄さが原因だと考えられる。教科書で扱っている「うれしさとは？」のように、児童が日常生活で数多く経験しているテーマを取り上げることで話し合いが深まるのではないかと考える。

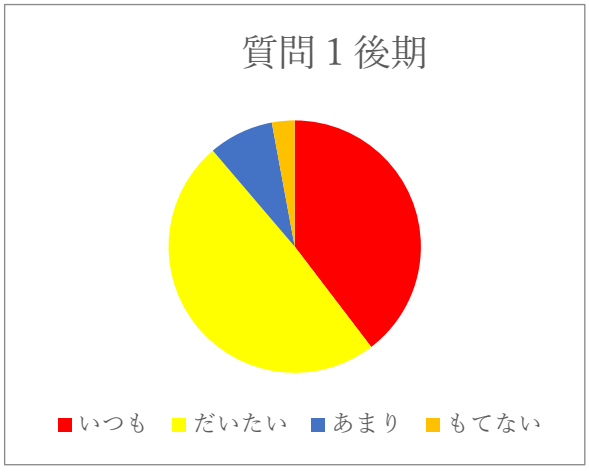
●ICT の活用良い点もあったが、悪い点も見受けられた。児童が発言する際に、周りの児童がタブレット PC の画面に注視してしまっていることである。共感する言葉がけをしてはいるが、考えを丁寧に受け止めているとは言えない様子であった。

7　考察

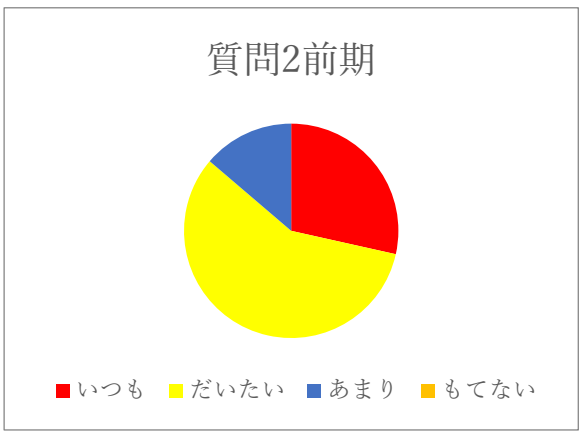
児童への意識調査のアンケート

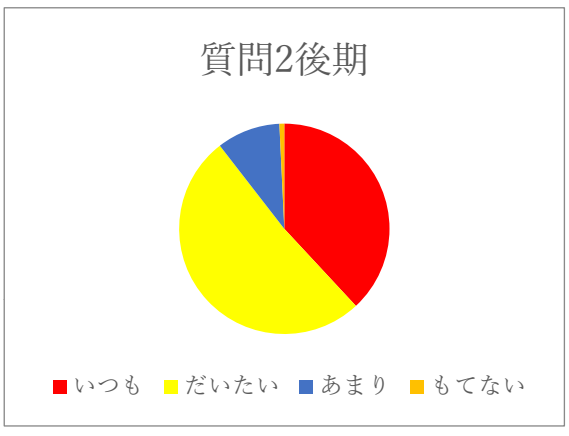
質問１　学習中に友達と話すとき、自分の考えをもつことができていますか。





質問２　友達の話を聞いて、「新しく知ることができた」、「よくわかった」と思うことはありますか。





全校児童に意識調査を行ったところ、前期と後期で変容が見られた。「質問１　学習中に友達と話すとき、自分の考えをもつことができていますか」と「質問２　自分の考えがもてないとき、どんなことを、考えをもつためのヒントにしていますか」という質問では向上が見られた。これは、仮説の手立てが有効に働いたためだと考える。

「仮説①単元のゴールを提示すれば、自分の伝えたいことを具体的にイメージし、考えを明確にすることができるであろう」の手立てを授業に取り入れた結果、６年生の授業のノートには「テーマが決まった。見通しをもつことができた」という記述が多く見られた。これは、単元のゴールの提示や学習（単元）計画の作成・確認、相手意識の明確化を行うことで、自分の考えを明確化することができるようになったからだと考える。これは「質問１　学習中に友達と話すとき、自分の考えをもつことができていますか」という項目で、「いつも」と答えた児童が１０％増えていることからも見られる。

「仮説②伝え合いの場を工夫すれば、進んで話したり聞いたりすることができ、表現する力が身に付くだろう」の手立てを授業に取り入れた結果、１年生の授業では自信を持って発言をする姿が見られた。これは、伝え合いの工夫や話し手の工夫、聞き手の工夫の手立てを取り入れたことにより、進んで話したり聞いたりすることができたからだと考える。また、質問１同様、「質問２　友達の話を聞いて、「新しく知ることができた」、「よくわかった」と思うことはありますか」という項目でも、「いつも」のポイントが１５％増えている。

また、児童の発表や作品からも、教員が作成した単元のゴールに近づけたと言える。このことからも、児童に身に付けさせたい力が、育成されてきていると言える。

８　研究のまとめ

（１）研究の成果

○単元のゴールの提示や学習（単元）計画の作成・確認、相手意識の具現化を行うことで、児童は考えを明確化し、適切に表現する力が身に付いた。特に教員が作成した単元のゴールの提示は有効であった。

○伝え合いの工夫や話し手の工夫、聞き手の工夫の手立てを取り入れたことにより、進んで話したり聞いたりすることができ、表現する力が身に付いた。

（２）今後の課題

・ICT の活用良い点もあったが、課題も見受けられた。児童が発言する際に、周りの児童がタブレット PC の画面に注視してしまった。伝え合いの場で、どのように ICT を活用して

いくことが有効であるか考えていく必要がある。